

「土着人類学」を勝手に提唱しています。

ご存知の通り、土着人類学は既存の学問ではありません。これからを生きていく術を考え、トライアンドエラーで実践していく。この行為を少しおおげさに土着人類学と呼んでいます。ただぼくの使う土着という用語は、一般的な意味とは全く異なるので注意が必要です。

辞書で土着と引くと、「先祖代々その土地に住んでいること。また、その土地に住みつくこと」といった意味が出てきます。英語で言うと **native** や **indigenous** と出てきます。どちらも「先住の」とか「もともとの」といった形容詞で **indigenous people** (先住民) のように使われます。ここには「時間的に前」という意識が含まれています。

「時間的に前」とは、弥生文化に対する縄文文化、ローマ文化に対するケルト文化、アメリカ大陸におけるヨーロッパ文化に対するネイティブアメリカン文化のような文脈で使用されるということです。しかしぼくは土着という言葉に「時間的に前」という意味を込めてはいません。ぼくが土着に込めるのは「固有のもの」というニュアンスです。そういう意味では「その土地固有の言語(方言)」や「その土地固有の建築様式」という時に使用される、**vernacular**の方が近い気がします。ヴァナキュラーについて、ウィーン生まれの思想家イヴァン・イリイチは以下のように述べています。

ヴァナキュラーというのは、「根づいていること」と「居住」を意味するインド-ゲルマン語系のことばに由来する。ラテン語としての **verunaculum** は、家で育て、家で紡いだ、自家産、自家製のもののすべてにかんして使用されたのであり、交換形式によって入手したものと対立する。(中略) ちょうど菜園や共有地からとれた基本的な生活物資のように、ヴァナキュラーな存在である。(I.イリイチ、玉野井芳郎・栗原彬訳『シャドウ・ワーク 生活のあり方を問う』岩波現代文庫、127頁。)

イリイチはヴァナキュラーを、近代社会の基本原理である交換によって手に入

れられるものではなく、まだ見ぬ他者のためではなく自分たちのために作ったり、使ったりするものという意味で使っています。ぼくのいう土着がイリイチのヴァナキュラーとは少し異なるのは、必ずしも交換に対して自立的な意味を込めてポジティブに使っているわけではないという点です。ぼくにとって土着は、良いも悪いもない「逃れられない病」のようなものだと思っています。人間である以上必ず土着を持っていて、この土着が社会とうまく折り合いがつかなかったりすると「障害」と呼ばれることもあるし、反対にそれを「個性」として昇華している人もいます。

土着とは「逃れられない病」のことです。言い換えると「目を背けようと思っても背けられないもの」とか「わかっちゃいるけどやめられない」ことだともいえます。そのような、自分のなかに確かにあって良い意味でも悪い意味でもどうしても消せないもののことを、ぼくは土着と呼んでいます。そして土着を隠し抑えつけて生きていくのではなく、土着を軸に生き方を考え、それを認め合える社会を作れないだろうか。そんな風に考えています。

こうして、人それぞれがそれぞれの土着を認め合いながら生きていく方法を探っていく中で、まずは自分が土着を軸に生きていく方法として「二つの原理を行ったり来たりしながら生きていく」ことが重要だと思い当たりました。なぜなら、そもそも人類は光と闇、太陽と月、男性と女性など、二つの原理のなかで生きてきたからです。しかし現代ではその原理が一つだけになってしまっていて、人類史的にみると今の社会の方がおかしいのではないかと、そんな風にも思っています。数値化しやすいものだけ、お金の換算しやすいものだけを評価してすべてを理解した気になっている現代社会の状況を、近代史研究者のジェリー・Z・ミュラーは「測定執着」という言葉でまとめています。

- ・個人的経験と才能に基づいて行われる判断を、標準化されたデータ（測定基準）に基づく相対的実績という数値指標に置き換えるのが可能であり、望ましいという信念
- ・そのような測定基準を公開する（透明化する）ことで、組織が実際にその目的を達成していると保証できる（説明責任を果たしている）のだという信念
- ・それらの組織に属する人々への最善の動機づけは、測定実績に報酬や懲罰を

紐づけることであり、報酬は金銭（能力給）または評判（ランキング）であるという信念

測定執着とは、それが実践されたときに意図せぬ好ましくない結果が生じるにもかかわらず、こうした信念が持続している状態だ。これが起こるのは、重要なことすべてが測定できるわけではなく、測定できることの大部分は重要ではない（あるいは、なじみのある格言を使うなら、「数えられるものすべてが重要なわけではなく、重要なものすべてが数えられるわけではない」）からだ。ほとんどの組織には複数の目的があるが、測定され、報酬が与えられるものばかりに注目が集まって、ほかの重要な目標がないがしろにされがちだ。同様に、仕事にもいくつもの側面があるが、そのうちほんのいくつかの要素だけ測定すると、ほかを無視する要因になってしまう。測定基準に執心している組織がこの事実気がつくと、典型的な反応はもっと多くの実績測定を追加するというものだ。そうするとデータに次ぐデータが蓄積されるが、そのデータはますます役に立たなくなり、一方でデータを集めることにますます多くの時間と労力が費やされてしまう（ジェリー・Z・ミュラー、松本裕訳『測りすぎ』みすず書房、2019、18-9頁）

現代社会は「何のために測るのか」という問いより先に、「とりあえず数値化しておく」という測定執着に罹患している状態です。そのせいで「数値化できるもの」の方が「数値化できないもの」よりも優先され、いつのまにか「数値化できないもの」は存在しないことにされてしまう。このような傾向は、土着を認めた上で生きていく本来の人類的なものではなく、土着を見ないふりをする近代的な生き方だといえます。近代的な生き方とは、本来は数値化できない土着の部分を人間の力によって征服し、科学的な力によって世界をコントロールできるという信仰に基づいた生き方です。

そのようなわけで、ぼくの思う土着は *indigenous* とも *native* とも *vernacular* とも異なりました。ではどんな訳語が適切なのかというと、そこで思い浮かんだのが *funky* という言葉です。でも辞書でファンキーを引くと、あまり良い意味が載っていません。もともとは「おじけづいた」とか「臆病な」といった意味を持っていたそうですが、ぼくにとってのファンキーはそういう意味ではあ

りません。ぼくがファンキーという言葉でイメージするものの源流は、どうやら1960年代のジャズの流行に行き着くようです。映画評論家でジャズ評論家でもあった植草甚一さんは以下のように述べています。

「アメリカ人のジャズ通にむかってファンキーの意味を教えてくださいと、みんな口をそろえたように、それは「ブルース的で」 *bluesy* 「たましいがあり」 *soulful* 「土のにおいがする」 *earthy* と説明づけてくれます。(植草甚一『ファンキー・ジャズの勉強』晶文社、1977年、27-28頁。)

植草さんは黒人独特の感じ方や言葉の使い方も踏まえて、ファンキーがジャズ用語として定着していったことを説明しています。このようにブルージーでソウルフルでアーシーという意味を含むファンキーは、「逃れられない病」である土着の訳語にピッタリだと思いました。そして土着というとどうしても静的なイメージがありますが、「逃れられない病」と折り合いをつけて生きていくことは「二つの原理を行ったり来たり」という意味で、動的なイメージも含まれています。この点も土着に対してファンキーという訳語をあてた理由です。

土着に含まれる動的なイメージを担っているのは、ソウルフルという言葉に表されているように、その土地が持つ霊性です。その土地固有の霊性のことを「ゲニウス・ロキ」といいます。土着のなかにはこのゲニウス・ロキが低音を響かせて踊っている、そのような動的な意味合いを込めています。そういう意味で、二つの原理を行ったり来たりしながら生きていくとは、土臭く、泥臭く、決してスマートではないけれど、「なんとかかんとか生きていく」ことを意味します。ミュージシャンの山下達郎は、同じくミュージシャンのサンボマスター山口隆との対談で以下のように述べています。

「心は売っても魂は売らない」-それがこの商売の根幹なの。すべての芸能、すべてのコマーシャリズムというのは、心のどこかのパートを売らなければならない。問題はその中でいかに音楽を作る上でのパッションや真実をキープできるか。ただの奴隷(スレーヴ)じゃなくて。モノを作るというのは、常にそういう問いかけがある。(山口隆『叱り叱られ』幻冬舎、2008年、19頁)

これだけ資本主義が社会に浸透した現代では誰しものが商売をする、つまり商品
を売られることを求められます。決してミュージシャンでなくても、特に第三次産
業に従事する人びとの多くは木を切り出したり、魚を獲ったり、製品を作った
りするのではなく、高い計算能力やコミュニケーション能力を有することを要
求され、自分を商品として売ることが社会人の必須のスキルに挙げられます。
そのような意味で、ミュージシャンではなくとも山下の言葉にはとても大切な
ものが含まれていることが分かるかと思います。

山下のいう魂こそ、ぼくのいう土着です。土着は人間の尊厳に関わります。だ
からそれを売ると奴隷になってしまう。奴隷とは「一つの原理で生きていく」
ことを意味します。尊厳を失わず、魂という土着を保ちながら生きていくため
に。そのためには「心は売っても魂は売らない」ような、二つの原理で生きて
いく土着の作法を身につける必要があります。まずは現代社会を駆動する資本
の原理とは異なる、もうひとつの原理に気づくこと。それは自分にとっての「逃
れられない病」が教えてくれます。土着は病、障害、老い、生理現象のように、
社会的ビハインドとして表れます。でもそれを排除しないこと。それが土着的
に生きていく第一歩です。